

1

個々の物事が

A エ B ア C イ D ウ 3 ウ

I どこない II 重みや責任

5 時の試練 (記述題) 7 ネット (完答) する

8 体系 9 X 手 Y 三 Z 水

10 a 所要 b 人工 c 玉石

2 活字 1 a 美德 c 風船

2 X た Y ま Z さ 3 小さき 4 工

5 肺活量 6 (記述題) 7 人間 (完答) たち

8 神様 9 ア 10 ウ 11 小説家

1

信頼性が高く、体系的な知識が

(同意可)

2

6 長年正体がつかめずに感じていたのもやもやしたところによる晴れ晴れとしい

(同意可)

配点		
1 9・10	2 1・2	各2点×12=24点
1 6	2 6	各6点×2=12点
その他		各4点×16=64点
		100点

1

「体系的な知識」と「断片的な知識」がどんなものかは、——線①のあとの段落で順番に説明されていた。それぞれの段落で「体系的」とは「や」「断片的」とは」の形でまとめられているので、そこを答えればよい。

2 A：「学校で使っている教科書」や「この本」にあげられている「体系的」な状態の例が続いている。B：「書物」と「ネット」に上がっている情報」を対比している。C：「ネットよりも本の方が優れている」点の説明から、「本よりもネットの方が優れている」点の説明へと話がうつっている。D：「ネットの情報を最大限に活用する」ときの注意点として「検索力や質問力」が必要であることをあげているので、「条件」のはたらきをする「ただし」がはいる。

3 「書物から得られる知識」と「ネットから得られる情報」の信頼性については②・③のあとの段落で説明されている。「書物」は「著者以外の専門家」が「内容の信憑性や正確性をチェック」するので信頼性が高いと言える。一方「ネットに上がっている情報の多く」は適切な「チェック」を受けていないので信頼性が低いと言える。

4 ——線④の次の段落で「何より問題なのはどの誰が書いたのかはつきりしない文章が多いことです」という形で「実名を名乗」っていない文章の問題点が書かれている。「実名を名乗ることなく」と「どの誰が書いたのかはつきりしない」とが似た意味であることもおさえておこう。

5 ——線⑤の「選抜試験」と答えの「試練」の意味のつながりや、——線⑤の直後にある「生き抜いてきた」と答えの直後にある「耐えてきた」が似た意味になることをおさえておこう。

6 「ネットよりも本の方が」どのように「優れている」かについては、——線⑥までの文章の前半部分で「書物から体系的な知識が得られる」こと、「書物で得られる体系的な知識と」ではじまる後半部分で「書物から得られる知識は信頼性が高い」ことが書かれていた。

7 ——線⑦からはじまる段落は、(C)の次の段落で示された「ネットの情報を最大限に活用する」際の注意点を、(D)の段落よりあとで説明している部分の中にある。

8 「書籍」、つまり「書物」を読むことで得られる知識である。

9 X「手に取る」：「手で持つ」。Y「第三者」：「当事者以外の人。そのことに直接関係しない人」。Z「呼び水」の意味は問いにある通りである。

10 a「所要」は「用事」の意味である「所用」と取り違えてはいけない。b「人工」も同音異義語の「人口」と区別しておこう。c「玉石」の「玉」は宝石のような貴重な物の、「石」は石ころのようにつまらないもののたとえである。

2

1 a「活字」は書物を印刷するときを使う文字の型をさす言葉だが、そこから印刷された文章そのものをさすことが多い。b「美德」は道徳になかった立派な行いやそのさまを表す。c「風船」は「風」の中や「舟」の中を続け字にせず一画ずついいねいに書こう。

2 X「たたずまい」：「そこにあるものの様子。またその雰囲気」。Y「ありのまま」：「実際にある通りの様子」。Z「ささいな」：「わずかなさま。取るに足りないさま」。

3 「田辺文学の秘密」とは直後に書かれている多くの小物のことであるが、問いにおいて『私』は『田辺聖子』がどのように作品をつくりあげていると考えてい「るかが聞かれていることに注意しよう。『私』の考えについては、『枕草子』の一文を引用したあとで「小さきものを…それを物語にされてきたのだろう」という形で書かれていた。

4 どの選択肢も本文中に書かれていることであるが、ここでは「懐かしさ」を感じる理由が問われているので、作品に親しんできた時間の流れが説明されているものを選ぶ。

5 ——線④の前の私の相槌で「肺活量の問題だったんじゃ」といきなり「肺活量」という言葉が出てきたことを疑問に思っしてほしい。

6 「たったそれだけのこと」は直前の「晴れ晴れとした気分にな」ることをさしている。どのようなことから「晴れ晴れとした気分にな」るのかをその前の部分からまとめればよい。

7 「田辺聖子」の作品にどのような人物が出てくるかは、「田辺文学の秘密」について書かれているところで説明されている。また、「主人公」が「宝塚の生徒さんたち」の「一生懸命さ」や「けなげ」などところを褒めていることもヒントとなる。

8 ——線④よりあとの段落から⑥までの段落では「田辺聖子」本人の人物柄について書かれており、はじめの「田辺さんのエッセーを…」ではじまる段落と終わりの「最強の応援者に愛され…」ではじまる段落でその内容がまとめられている。⑥の前に「やはり」とあることから⑥には一度出てきた言葉がはいると考えられるのはじめの段落から答えを探すとよい。

9 文章全体からもこの部分からも「田辺聖子」に対する好意的な心情が読み取れるのでアとウにしばらく。ヒョウ柄が混じっているのは「田辺聖子」のミスであるが、そのようなところも人間らしい魅力として受け取っているのである。

10 ——線⑧の一行前に「私も相当なタイガースファンを自認していた」とあることや、タイガースを応援する「田辺聖子」の様子から熱心なファンとして「下柳」を見ていることがわかる。

11 本文の三段落目に自身の所感として「小説家同士のつながりは…案外ないものである」と書かれていた。

以上